



理財論

三

大藏省
蔵書



第九篇

轉 通常專ラ用井ル所ノ諸直税ノ性質其結果及ヒ其邊

第一章

直税ノ總質

予輩カ既ニ前編第六篇ノ第三章ニ開陳セシカ如ク直税ハ其額
預ノ確定シ且明瞭ナルノ便益アリ故ニ之ヲ用井ルハ則チ
納税者カ其負擔スル所ノ租税ト其受クル所ノ便益トノ權衡ヲ
精細ニ測知スルヲ得ヘシ又直税ハ間税ノ如キ著シキ弊害後
チ第十一編ニ明示スヲ有セス且惡弊過度詐偽ノ患モ少ナク又
收税ノ事ニ於テハ多費ヲ要セス又納税者ノ家産ニ能ク相當ス
ルモノト謂フヘシ蓋シ直税ハ各人ノ財産ノ最モ確乎タル事
トナルモノニ課スルカ故ナリ其他尚直税ハ富ノ産出其融通共



大正十一年四月
大隈侯爵邸贈

良善ノ用法ヲ妨害スル丁亦又間税ノ如キ若シキモノニ非サルナリ

既ニ第七篇ノ第一章ニ於テ簡約税法ノ事ニ就テ開陳セシ所ノモノモ亦ク此直税ノ事ニ適合スヘキナリ

第二章

人ニ関スル租税即チ分頭税課役課役ブレスタシヨシ金穀又ハ身体公務ヲ助成スルヲ以テ軍役海軍役

夫レ分頭税ハ納税者ニ對シ直接ニ係ルノ便アリ且之レヲ舉行スルニハ最も容易ナルノ益アリ然リト雖此税ハ不易ノモノナルカ故ニ貧富相異ナル家産ノ納税者ニ同一ノ税額ヲ賦課スルノ弊害アリ

抑モ分頭税ノ起源ハ大古ノ時代ニアリ其初メ立法者ノ此税ヲ案出シタルハ蓋シ全ク然ラシムルモノナルヘシト思ハ

イ三

ル何トナレハ此税法ハ賦税術ノ濫觴タレハナリ

此分頭税ハ社會中ニテ獨權ヲ有シタル上等ノ種族ハ一般ニ之レヲ出タサハルモノトシテ獨リ其下等ノ人民ノミ之レヲ出クスヘキモノトセリ故ニ分頭税ヲ支給セル者ハ卑賤ノ証徴トナリタリキ然レモ幸ヒニシテ此税ハ各國ノ會計豫算簿中ニハ漸ク煙滅セリ

然リト雖此分頭税ノ部類ニ列序セサル租税ト雖亦多頗ル之レニ類似スルモノアリ故令ハ鹽税ノ如キ即チ是レナリ何トナレハ各自費ス所ノ鹽ハ其分量殆ント同一ナルヲ以テ自ラ政府ハ富人貧人ヲ問ハス皆一樣ノ税額ヲ徴收スル至ルモノトシハナリ

封建時代ノ課役方今ト雖此或ル國ニ於テハ尚ホ存セリ及今ノ軍役モ亦ク分頭ノ方法ナリ其他尚或ル國ニ於テハ下等ノ

人民ノニ支給スヘキ分頭税アリ及令ハ土耳其國ニ於テ耶蘇教徒及ヒ猶太人ハ家畜税ノ名義ヲ以テ別種ノ租税ヲ支給シ又西亞ニ於テハ邑民及ヒ下等ノ都民ノ男子ニハ總テ分頭税ヲ賦課セリ但シ其諸邑ノ大平ハ其居民ノ財産及ヒ其歲入額ニ應ジテ之レヲ賦課ス又日耳曼ノハンブルニハ特リ下等ノ都民及ヒ外國人ノ支給セルモノニシテ上等ノ都民ノ支給セル租税アリ又澳地利ニ於テ猶太人(中古ニ於テハ各國概テ此猶太人ニハ檀ニ賦税スルヲ得ヘキモノト看做シタリ)ノニ別種ノ租税アリシカ之レヲ廢止シタルハ近時千八百四十八年ニアリ又英國ニテハ僱婢ニ税ヲ賦課シタリ(然レモ之レヲ出タス者ハ到底其雇主ナリ故ニ此税ハ支消税及ヒ奢侈税ト一般ナリ)又往古羅馬ニ於テハ獨身ノ者ニ賦税シタリ(此税ハ婚姻セサルモノナカレシノ以テ人口ヲ増殖セシムルカ為メノ壓制ノモノナリ)

モシテスキウ氏カ往昔ノ不公平ノ事ヲ謂ヘルトアリ曰ク分頭税ハ自ラ壓制政治ニ屬シ又商品ニ賦課スル租税ハ自ラ人民ノ自由ノ權利ニ屬スルモノナリト方今ニ至リテハ立法者ハ分頭税ニ就テ敢テ格外クルトテ許サス而メ人民一般ニ貴賤貧富ヲ問ハス悉ク之ヲ賦課シタリ(或ル國ニ於テハ尚ホ格外アリテ之レヲ免カルモノアリ然リト雖凡此租税ハ許多ノ金額ヲ收入シ得ヘキモノニアラス且納税者ノ家産ニ應ジテ之レヲ賦課セサルモノナルカ故ニ文明國ノ會計簿中ニハ漸次之レヲ除却シタリ若シ此分頭税ヲレテ納税者ノ家産ト相當セシムルキハ即チ歲入税トナルヘシ佛國ノ分頭税ハ各人ノ日々得ル所ノ賃銀三日分ノ價額トナセリ而メ其一日分ノ價額ヲ豫定スルニハ各協會ニ於テスヘキトトス但シ其一日分ノ價額ハ五十サンチーハ一アサンチーノ百

ナリノ一ヨリ少カラス一「フランス」ク五十「ハンチー」ムヨリ多ラサル
モノト定メラレタリ
所謂分頭税ノ内ニテ最モ酷ナルモノハ軍役ナリ蓋シ之レヲ名
ケテ血税ト称スルハ實ニ至當ト云フヘシ加之此軍役ハ陸軍規
律ニ由テ甚タ不公平ニ配賦セラル、モノナリ何トナレハ自己
ノ歳入ヲ以テ其活計ヲ立ツルコトヲ得又千五百「フラン」クヲ出シ
テ以テ之レカ役ヲ免カレシムルヲ得ル人ノ男子ト貧困ナル農
家又ハ職工ノ男子ニシテ其家族ニ缺クヘカラサルモノト雖
其職業ヲ廢棄シテ以テ其壯年中ノ七年ヲ此ニ消費シ加之其健
康又ハ生命ヲ抛棄セサルヘカラサル者ト此ニ子ノ間ニ著シキ
幸不幸アレハナリ又海軍規律ハ猶一層不公平ナル召募法ヲ以
テ海邊ノ居民ヲシテ終身此ニ從屬セシム
營業税ニ於テモ或ル際ニ於テハ復タ分頭税ノ性質ヲ有スルコト

アリ又分頭税ト雖モ納稅者ノ家産ニ應シテ賦課スヘキモノト
スレハ則チ亦タ營業税ト成ルヘシ（後々營業税ノ部ヲ參考スヘシ）
佛國ニ於テハ村落ニ交通セル鐵道ノ公役ニ関スル租税ハ即チ分頭
ニシテ各々若干ノ日數間器械ヲ携ヘ或ハ携ヘスレテ各々此ニ役ニ就
クヘキモノトナシ且其幾分ハ金錢ヲ出シテ之ヲ免カル、コトヲ得ヘキモノトセリ
分頭税ト雖モ納稅者ノ歳入ニ應シテ之レヲ徵收スルモノハ即
チ歳入税ト云フヘキナリ

第三章

動産税又ハ家賃税及ヒ家屋税

此租税ハ資本税又歳入税ト見做スコトヲ得ヘキモノナリ何トナ
レハ動産又ハ家屋ノ多寡大小ハ資本又ハ歳入額ノ秤量トス
キモノナレハナリ然レモ此秤量ハ常ニ精細ノモノニ非サルナ

リ蓋シ資本又ハ歳入額ニ不相當ナル動産ヲ有セサルヘカラサル
ル營業アルヲ以テナリ(後々第八章ニ歳入税ノ事ニ就キ論述ス
ル所ノモノヲ参考スヘシ)

第四章

地稅 附通常ノ地稅及ヒ土地ノラント純益ヲ引去
リタル收入
部一ニ賦課スル理論上ノ地稅

凡ソ地稅ハ諸稅ノ基本トモ云フヘキモノニシテ且萬國一般ニ
之ヲ施行スル所ノモノナリ而メ其收入額ハ最も著シキモノニ
シテ概テ諸國ノ歳入額ノ殆ント四分ノ一ハ此稅ヲ以テ成ルモ
ノナリ然レモ又地稅ハ土地ノ本来收穫ヲ生スヘキ額及ヒ其
際收穫ノ多寡ヲ明細ニ測定スル能ハス且此稅ノ遷轉ノ事情ヲ
明知スル能ハサルヲ以テ其性質ヲ推究スルト極メテ難キモノ
ナリ

地稅ノ性質ヲ能ク解剖スレハ即チ左ノ如クナルヘシ第一農家
ノ營業ノ利益(耕作資金ノ利息及ヒ其耕作ノ利潤ヲ云フ)第二農
業ノ為メニ外面ニ用ヒスレテ内實用ヒタル資金ノ利子第三土
地ヲ善良ナラシムル為メニ近時用ヒタル資金ノ利子第四耕地
ノ所有者ノラント是レナリ此第三第四ノ元質(收入ノ)ハ常ニ相
混セントスルモノナリ

地稅ハ其性質ニ因リ右ノ種々ノ元質ニ多少賦課セルモノナリ
論者ノ中ニハ此地稅ヲシテ不當ニラントノ税ト名ツケ而シテ
此ラントヲ以テ屢々利益(地主カ直接ニ得ルカ或ハ其借地人ト
ノ定約ニ由テ得ル所ノ利益)ヲ包含スル地主ノ收入ト同シキモ
ノト見做スモノアリ是ヨリ以下ラントト云フ語ヲ用キルニハ
斯ノ如キ意味ヲ以テスルトナク總テ經濟上ノ詳解ニ從フ所ノ
精密ナル意味ヲ以テセザルヘカラス

地主ノ真正ニシテ且理論上ノラントト云フ者ハ其性質素ヨリ
賦税スヘキ收入ナリ蓋シ此ラントトハ其多寡ニ因リ農業上ノ商
品ニ昂低ヲ生セシムルモノニアラスト論定スルヲ得レハナリ
是故ニ此ラントトニ賦課スル租税ハラントトノ全額ヲ徴收スル
雖モ其商品ノ價ヒニ敢テ影響ヲ来タストナシト云フ一種特別
ノ能力ヲ有スルモノト為ヌヲ得ヘシ斯ノ如キ租税ハ諸税ノ内
ニテ最モ弊害ノ少ナキモノト思ハル
然リト雖モ又斯ノ如キ租税ノ成立スルニ於テハ更ニ土地ニ資
金ヲ投スル者ナカルヘシ然ラハ則チ是カ為メニ農業ハ衰微シ
人生必須ノ物品ハ減少シ國家繁榮ノ進歩ハ停止シ又随テ人ノ
經濟ヲ行ヒ風儀ヲ正クシ以テ益々開進セントスルノ氣象ハ漸
ク煙滅スルニ至ルヘシ
租税ノ事ニ就キ考究スヘキ一論題ハ即チ夫ノラントトノ斯ノ如

キ貴重ナル能力ヲ利シテ以テ有害ノ結果(税ノ物價ニ感スル)ヲ
避クルニアリ而シテ之レヲ考究スルニハ先ツ農業上ノ
各收入ノ内ニテラントトノ純益トヲ區別セサル可カラス
然リト雖モ此事タル最モ難キモノニシテ方今尚ホ之レカ區別
ヲ明瞭ニスル能ハサル所ナリ
カボルコトヲ氏ノ言ヘル如ク曾テ勞カセシヲアリシカ今マ全
ク遺忘シ或ハ覚知セサルカ如キ勞カヨリ生シタル收ノ三ノ一
部ヲ徴收スル所ノ租税ニ非サレハ恐ラクハ夫ノラントトニ賦課
シタル租税ト看做スヲ得ヘキモノナカルヘシ
斯ノ如ク土地ノ收入中ニ就キ夫ノ貴重ナルラントトノ分量ヲ精
密ニ測定スル能ハサルモノナルガ故ニ其分量ヲ定ムルニハ只
大略ノ預算ヲ以テ足レリトシテ莫実ノ分量ト看做ス所ノ額ヨ
リモ一層低下ノ額ヲ以テニサルヘカラス

右ニ論スル所ノモノハ皆理論上ノモノナリ今ヤ實際施行セ
ル尋常ノ地稅屢々夫ノラントノ稅ト混視スルモノアリニ就キ
亦夕之レヲ講究セントス

抑々地稅ノ不易ナルヲ(稅額ノ)ハソカルド「マキ」
「バシ」等ノ經濟家ハ土地ヲ善良ニシテ以テ多利ヲ占得セント
汲々スル所ノ農民ニハ一大奨励ト成ルモノト為セリ然リト雖
此不易ナルヲハ正當タルヲノ原理ニ適合セサルモノナリ何
トナレハ此原理ハ土地ノ收入額ノ變スルニ隨テ其時々稅額ヲ
改正シテ以テ各自ノ收入額ト相當スル租稅ヲ徵收スルヲニ
レハナリ是ニ於テカ「バシ」氏ハ土地ノ改良ノ度ハ時々變化シ
又隨テ其收入額ニ時々差等アルモノナルカ故ニ到底之レカ租
稅ヲ正當ニ賦課スルヲ能ハサルモノナリト云フヲ以テ己ノ說
即チ地稅ヲ不易ノモノト為スヲ「バシ」氏ハ土地ノ改良ノ度ハ時々變化シ

地稅ヲシテ不易ノモノト為サハ此稅ノ徵收スル所ノモノハ即
チ政府ノ所有物ノ收入ト等シキモノトナリテ各人ノ所有地ハ
皆政府ト共有スルモノ、如キ情狀ニ至ルヘキナリ又若シ此不
易ノ為メニ稅額ト收入額トノ權衡ヲ失シ而レテ土地ノラント
ヨリモ多ク徵收スルハ即チ地稅ハ農家ノ純益又ハ其財產ノ
一部分ヲ奪フニ至ルヘシ

總テラントノ額ヲ以テ地稅ノ最大極數ト為サ、ルヘカラス蓋
シ地稅ノ此ラントノ額ヲ超過スルキハ地主又ハ借地人ハ農業
ヲ抛棄スルニ至ルヘケレハナリ
凡ソ地稅ヲ創立スルハ即チ各人ノ所有地ノ一部分ヲ收奪ス
スルモノ、如シ然レ其後之レヲ買フ者ハ其原價ヨリ稅額ヲ
除却シタル價ヒヲ以テ之レヲ購求スルモノナルカ故ニ決シテ
其地稅ヲ出サ、ルモノ、ナシ

是ニ由テ之レヲ觀レハ今モ其稅額ヲ變更シテ之レヲ增加スルキハ即チ其地主ノ收入額ノ一部分ヲ收奪スルカ如ク又之レヲ減少スルキハ彼等ニ贈物ヲ授クルカ如シ夫レ理論上ニ於テ歲入額ノ多寡ニ應レテ平均ニ租稅ヲ賦課セントスルノ企圖ハ全ク正當タルコトノ原理ニ基クモノト云フヘシ然レモ實際ニ於テハ此原理ニ基カントスルモ尚ホ甲者ニ不當ノ利益ヲ得セシメ乙者ニ不當ノ損失ヲ被ラシムルモノナキコト能ハサルナリ予輩ハ此ニ唯讀者ノ記憶ノタメニ開陳スヘキコトアリカダストス地稅ノヲ改正スルハ實ニ至難ノ業ニシテ容易ニ之レヲ改正スル能ハサルモノナリ又此カダストル中ニ預定セル所ノ地價ハ決シテ確實ノモノニ非サルナリ是ヲ以テ斯ノ如ク容易ニ地價ヲ改正スヘカラサルノ方法ヲシテ方今英國ニ於テ歲入稅ノ為メニ施行セルカ如ク土地ノ收入額ヲ常ニ調査改正スルノ方

イ九

法ニ代ラレシメハ此地稅ノ大ヒニ公平ニ歸スル所アルヘシト云フコト即チ是レナリ然レモ又予輩ハ姑ラク斯ノ如ク常ニ調査シ以テ其時々稅額ヲ變更スルコトヲ實際施行セルト假想スルモ其結果ハ蓋シ此時々ノ調査改正ヲ施行セサル時ト一樣ナラン又然ラハ則チ時々ノ變更アルヲ以テ地價ヲ推定スルコト但時ヨリモ一層困難ナルヘシ加之土地ノ賣買等ノ為メニハ常ニ地稅ノ變更アルヲ以テ大ニ不便ヲ醸スナラン縱令稅額ヲ時々變更スルコトニ就テ亦タ斯ノ如ク其種々ノ弊害アリト雖モ地稅ヲ不易ノモノト為スハ即チ稅額ヲシテ土地ノ收入額ニ平等ナラシムト云フ正當ノ原理ニ適合セサルヲ如何セン實ニ甲地ノ利トナリ乙地ノ害トナル往昔ノ如キ不良ノ賦稅法ヲシテ真正ノモノト思想スルコト能ハサルナリ蓋シ往昔

ニ行ハレタル斯ノ如キ賦税法ヲ安リニ尊重スルニ於テハ亦タ
諸般ノ特許(免稅等)ヲ至當ノモノト見做ニ至ラサルトモ保チ難
カルヘシ既ニパリヨ¹氏ノ言ヘル¹アリ曰ク普¹西ノ會計¹官¹ホ
フマ¹ニ氏ハ貴族ノ土地ハ免稅タリト云フ法度ヲ防護セントス
ルカ為メニ此租稅論ニ於テハ大ニ拙劣ノ者トナリタリト
ロ¹シ¹ロ¹ス¹オ¹アル¹ミ¹ル¹等ノ如キ經濟家ハ皆地稅ヲ變更ス
ルノ說ヲ主張シタリ蓋シ上ニ述フル所ノ點ニ着目スルニ因テ
然リシナラン

上ニ論セシ如ク英國ノ歲入稅ノ方法ニ倣ヒテ時々土地ノ檢査
ヲ行ヒ以テ其稅額ヲ變更スルニ於テハ亦タ種々ノ弊害アリト
言フト雖¹氏常ニ屢ク檢査ヲ行フ¹ナク適宜ニ其期月ヲ遠クシ
又稅額ヲシテ收入額ノ一小部分ヲ超過スル¹ナカラシムルニ
於テハ地主又ハ其借地人オ土地ヲ豐饒ニシ以テ其收穫ノ量ヲ

イ十

多カラシムル¹ヲ怠タルノ患ナク又農業ノ衰頹ヲ醸スノ恐レナク加フルニ
賣買ニ於テモ不便ヲ生スル¹ナカルヘキナリ

地稅ノ遷轉ノ事情ヲ考究スル¹ニ就テハ紛々トシテ論說一ナラス¹フイ¹ジ¹ヲ¹ク¹ラ
ト¹論¹ノ¹說¹ニ¹據¹レ¹ハ¹地¹主¹ノ¹ミ¹カ¹直¹接¹或¹ハ¹間¹接¹ニ¹到¹底¹之¹レ¹ヲ¹支¹給¹ス¹ル¹ニ

至ルモノトセリ近時ノ經濟家ノ中ニモ亦種々ノ所見アリテ其說一定セ
サルカ故ニ或ハ物產者ヲシテ真ニ之レヲ出タスヘキモノト為シ或ハ支消
者ヲシテ真ニ之ヲ出タスヘキモノト為セリ

若シ地稅ノ往昔ヨリ成立シ且其稅額變セサルモノナル¹ハ¹總
テ土地ハ其所有者ト政府トノ共有ノモノ、如クニシテ地價ハ
此稅ノ設ケナキ時ヨリハ其稅額ニ從テ減少セルモノナルカ故
ニ現今之レヲ所有スル者ハ其稅ノ事ニ就テハ毫モ關係ナキモ
ノニシテ全ク其稅ヲ出サハルモ、如シト雖¹氏(始メ之レヲ讓
受又ハ買受クル¹キ¹ハ¹其¹稅¹額¹ヲ¹除¹却¹シ¹タル¹價¹ヒ¹ヲ¹以¹テ¹ス¹ル¹カ¹故

二今現ニ收税官ヨリ徴收セラル、ヲ見テ猶ホ真ニ之レヲ出タ
ス者ト誤認セリ又若シ地稅ハ往昔ヨリ成立シ且共稅額時々變
スル者ナルハ此稅ノ一部分ハ右ノ如クニ其所有者ハ之ノ出
サ、ルモノ、如クナレトモ他ノ一部分ハ真ニ之レヲ出スモノト
云フヘキナリ

又今新タニ一地稅ヲ創立シ而シテ後來之ヲ永續セシムル時カ
或ハ邊力ニ其稅額ヲ増加スル時カ或ハ只一時更ニ一地稅ヲ設
立スル時ハ此稅ヲ全ク出タス所ノ者ハ即チ地主ナリ實ニ稅額
ノ増加ハ田圃ノ為メニハ恰モ暴風ノ如キモノナリ然レトモ又地
主ハ現ニ收税官ヨリ徴收セラルト雖モ其借地人ト定約ヲ締
盟スル時ニ際シ其賃料ヲ増加シテ以テ彼レニ其稅ヲ出タサシ
ムルヲ務メ又其借地人ハ地主ト等シク產物ノ價ヒテ増加シ
テ以テ亦ク其支消者ニ之レヲ出サシムルトニ汲々スルモノナ

イ士

然リト雖モ又土地、物產ノ種類、市場ノ景況、地主ニ對シテ其借地
人ノ競争、物產者ニ對シテ其買主ノ競争等ノ事情ニ從テ斯ノ如
ク其稅ヲ他人ニ全ク出サシムルヲ得ルアリ或ハ其一部分ノ
ニニ非サレハ之ヲ出タサシムルヲ能ハサルアリ蓋シ地稅ノ此
遷轉ニ就キ其帰着スル所ヲ確定スル事ニ就テハ各ク所見ニ從
ツテ種々ノ論說アル所以ノモノハ即チ此ノ種々ノ事情アルヲ
以テナリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ地主及ヒ耕作者カ其說ヲレテ全ク物產ノ
支消者ヨリ出サシムヘキノ時宜アリ又充分ニ之レヲ出タサシ
ムルヲ能ハサルノ事情モアルヘシ却テ何レノ際ニ當リテモ地
稅ハ常ニ人民ノ社會ヲ衰微セシムルノ結果ヲ来タスベキモノ
ナリ然レトモ又政府ノ此組テ能ク使用スルハ此ヨリ生スル所

ノ益ヲ以テ此喜ヲ補フニエルヘシ
フイジオクラートト論ハ土地ノ物産ヲシテ其他ノ諸物産ヲ産出ス
ヘキ單一ノ本源ト誤認シ以テ地主ノ收入ニ非サレハ賦税スヘ
カラサルモノト論述シタリト云フハ予輩ハ既ニ之ヲ聞陳シ
又土地ニ賦課スル單一税ハ其額最輕少ニシテ其收入ノ一小部
分ヲ徵收スルノ際ニ非サレハ決シテ正當ヲ得タルモノニ非ス
且斯ノ如クナスニアラサレハ之ヲ設立スヘカラサルモノナリ
ト云フモ亦タ既ニ論述シタリ今ヤ此事ニ就キ尚附言スヘキ
トアリ夫ノ土地ニ賦課スル單一税(土地ヲ奪收スルノ特質アル
モノナリ)ハ邑人ノ過半地主トナリタル國ニ於テハ決シテ之ヲ
施行スルヲ能ハサルモノナリト云フ即チ是レナリ
地稅ハ實ニ土地ノ利潤ノ額ニ應シテ徵收スヘキモノナリ但シ
之レヲ徵收スルノ方法ハ種々アリ即チ此方法ヲ三種トナス第

イ十三

一ハ其總收入額ニ比例シテ其一部分ヲ徵收ス第二ハ諸雜費ヲ
除却シタル利潤ノ額ニ比例シテ其一部分ヲ徵收ス第三ハ政府
ノ此稅額ヲ預シテ確定シテ後々之レヲ毎歲各納稅者ニ配賦シ
但シ此配賦ノ方法ニ又二様アリ即チ第一ハ政府ニ於テ多少種
マニ之レヲ行フノ方法第二ハ各人ノ所有地ノ一個毎トニ其產
出額ト其價格トヲ預シテ推測シタル額ニ應シテ之レニ配賦ノ
比例ヲ定ムルノ方法是レナリ此第二ノ方法ハ最モ良善ノモノ
ト雖モ其產出額ト價格トヲ推測スルノ法ハ最困難ナルモノナ
リ方今佛國ニ於テハ現ニ此方法ヲ實行セリ則チ其會計法令(政
府ノ歲入出額ヲ確定スルモノ)ニ據リテ地稅ノ總額ヲ各州ニ配
賦ス各州會ニ於テハ復タ之レヲ各郡ニ配賦シ各郡會ニ於テハ
復タ之レヲ各邑ニ配賦ス而シテ各邑會ニ於テハ各人ノ所有地
一個毎トニ附キカダストル地稅中ニ定マリタル其價格ニ應

シ又其産出額等ヲ定ムルイ及ヒ是等ヲ計較スルノ或ル原法
ニ繼テ復タ之レヲ各地主ニ配賦スルモノトナス

第五章

建物税 附 門戸税 及 ヒ 窓牖税

建物税ノ一部分ハ建物ヲ建築シタル土地ニ係レルヲ以テ前章
ニ述フル所ノ地税ノ一種トナリ又他ノ一部分ハ即チ真ニ建物
ニ係ルモノナリ此第二ノ一部分ハ其借主ヨリ間接ニ之レヲ文
給スルトニ至ルヘシ何トナレハ其建物主(貸主)ハ素ヨリ收税官
ニ納ムル建物税ノ外ニ其資金ノ利子ヲ得ルノ目的ヲ以テスル
ニ非カレハ之ヲ建築セサルモノナレハナリ而シテ人口増殖スレ
ハ復タ新クニ建築ヲ要スルノ勢ニ至ルヲ以テ建物主ハ其増殖
スルニ隨テ此税ヲ全ク借主ニ支給セシムルヲ得ヘキモノナリ
抑ク此税ハ之レヲ徴收スルニハ大ニ便利ニシテ且自ラ納税

者ノ家産ト能ク相當シ又家屋ハ一般ニ其借主ノ家産ト相當ス
ルモノナルカ故ニ此税ニ就テハ各自ノ家産ト不相當ナリト苦
情ヲ鳴ラス者最モ少キモノナリ但シ其職業ノ種類ニ因リテ其
家産ニ不相當ナル家屋家財ヲ要スルノ際ニ於テハ格外トナス
佛國ニ於テハ人口調査ヲ舉行スル毎トニ必ス此税ノ當否ヲ審
査ス

門戸及ヒ窓牖ニ賦課スル陪税(佛國大改革ノ時ニ暫時之レヲ設
立シタリ)ハ建物税ニ同シ性質ノモノナリ然レモ納税者ノ家産
ト相當スルトニ就テハ稍建物税ノ如ク精密ナラサルヘシ加之
此税ハ家屋ノ窓牖ヲシテ人ノ健康ノ為メニ缺クヘカラサル空
氣ヲ交通スルモノ、ニ減少セシムルカ如キ痛歎スヘキ結果
ヲ来タスベキモノナリ
千八百五十一年英國ニテハ此建物税ヲ廢止シテ家屋ニ就キ均

税ト云フモノヲ設立シタリ蓋シ此建物税ノ起源ハ封建時代ニアリ

第六章

諸營業ニ関スル租税即チ免許税營業税

凡ソ諸國ニ於テハ或ル營業殊ニ公用地ヲ占領スル營業(劇場、劇、烹店、踊歌場、小賣酒店、茄菲店等ノ如シ)ヲ為サントスルニハ先ツ之レカ免許ヲ得ルニ非サレハ能ハサルモノトセリ蓋シ此免許ハ警察上ノ一方畧ニシテ且政府ノ歳入ノ一源泉タリ
營業税トハ諸般ノ營業ニ賦課スル租税ヲ云フ佛國ニ於テハ總テ營業者ハ税額ノ一樣ナル税(但シ諸營業者ヲ數等ニ分テ而シテ其等級ニ因リテ其税額差違アリ)ト又居家ノ價格ニ比例スル税トテ課セラレヘキモノトナス而シテ此税ハ其居住スル地ノ人口ノ多寡ニ因ツテ亦差等アルモノトナセリ

十一

佛國政府ハ斯ノ如ク注意シテ以テ此税ニ不公平ナカラシメン
トスト雖氏微々タル商人ヨリ其歳入額ニ應シテ徴收スル所ノ僅少ナル營業税ハ銀行主又豪商ヨリ徴收スル所ノ巨額ノ營業税ヨリモ其比例尚ホ大ニナルモノナリ曩ニ大藏卿タリシバシ
「氏カ此税ノ事ニ就キ言ヘル」アリ曰ク營業者ノ彼等級ト是ノ等級トノ間ニ於テ顯然タル此不同ハ尚ホ同一ノ等級中ニモ亦ク存セリ而シテ此不同ヲ全ク消滅センメント試ムルモ得ヘカ
ラシト又同氏ハ營業税ヲ課セラレタル者ハ其製造品ノ買主ニ到底此税ヲ出サシムルニ至ルヘント想像シタリ然リト雖
氏營業者カ買主ニ對シテ其製造品ヲ販賣セント各々若シキ競争ヲ為サハル時ニ非サレハ之レヲ買主ニ出サシムルニ至ルモ
ナカルヘシ若シ又營業税ハ總テ買主カ之レヲ出タスニ至ルモノナレハ貧シキ買主ハ常ニ微々タル營業者ノ製造品ヲ購求ス

ルモノナルカ故ニ貧人ハ富人ヨリモ多分ニ此税ヲ課セラル、
ノ道理ナリ蓋シ微々タル營業者ハ盛大ノ營業者ヨリモ多分ニ
賦課セラル、比例ノモノナレハナリ
營業税ハ諸般ノ營業ニ悉皆賦課セラレ之レヲ免カル、者ナ
カラシムルハ至當ト云フヘシ凡ソ何ノ營業ト雖モ多少ノ利益
ヲ生セサルモノナキカ故ニ總テ營業者ハ皆國民保護ノ為メニ
要スル公費ヲ補助セサルヘカラス是ノ故ニ智術ヲ以テスル業
ヲ營ム者例スレハ代官者、醫師、機械師、教師、僧徒、政府ヨリ宗教ノ
為メニ職俸ヲ給セサル國ニ於テハト雖モ皆此税ヲ免カル、ノ
道理ナカルヘシ是レ則チ經濟上ノ詳解(此詳解ニハ是等ノ職務
ハ其他ノ職業ト同一ナルトヲ明示ス)ニ根據スル正當ナルヲノ
原理(上ニ論述シタリ)ニ適合スルモノナリ

第七章

イナ

資本税

總テ不動産税ハ皆資本税ト想像スルヲ得ヘシト雖モ然レモ又
不動産税ヲ以テ屢々資本税ト看做スコアリ
人民ノ資本即チ其諸般ノ所有物ニ賦課スル租税ハ往古雅典ニ
於テ之レヲ設立シタリト云フ又方今亞米利加合衆國ニ於テ之
レヲ成立セル所多シ
各人ノ所有セル資本ノ價值ハ本人ノ報告ニ據リ之レヲ定ムル
モノトセリ但此報告ハ委員アリテ之ヲ検査ス
獨逸國ニ於テモ斯ノ如キ租税ノ種類アリ又現ニ此名稱ヲ以テ
スルモノモアリ千八百四十八年其「バード」聯邦ニ於テカビタル
ストエ(資本税)ナル名号ヲ以テ資本ノ價值ノ千分一ヲ徵收ス
ル資本説ヲ設立シタリ又佛國及、其他ノ國ニ於テ往昔成立セ
ル租税ノ中ニモ亦此資本税ノ如キモノアリキ

第八章

歳入税

按スルニ都テ租税ハ悉皆歳入税ニ非サルハナシ尚ホ之レノ詳
 言スルハ諸般ノ租税ハ皆人民ノ歳入ノ一部分ヲ徴收スルモ
 ノナリ予輩ハ既ニ之ヲ論述シタリ今此ニ論スル所ハ直キニ此
 歳入ニ賦課セル租税ノ事ノミヲ以テス抑ク此説ノ事ニ就キテ
 ハ近來論者ノ大ニ之ヲ論究スト雖モ曾テ此税ノ暗ニ成立セル
 一ヲ覺知セス之レヲレテ全ク新設ノモノト誤認セリ
 今茲ニ論スル所ノ歳入税トハ各人ノ歳入ニ就キ本人ノ姓名ヲ
 以テ直接ニ徴收スル租税ヲ云フ故ニ此税ハ唯其名目ト其區別
 ト其賦課法トノ異ナルノミニシテ其税源ハ曾テ政府ノ汲ニ来
 リタル所ノ税源ト決シテ異ナルトナキモノナリ然レモ論者ノ
 中ニハ此税ヲ設立スルハ即チ新クニ一税源ヲ開キタルモノト

イナス

誤認スルモノアリ

曾テ諸國政府ハ何レノ時ヲ問ハス總テ租税ヲレテ人民ノ歳入
 ニ賦課センメント急心シタリキ往古雅典ニ於テ此歳入税ヲ設
 立シテ以テ戦争ノ時又ハ危急ノ時ニハ資本税ノ外ニ國內ノ富
 者千二百人ヨリ之レヲ徴收セシトアリ
 又往昔ノ經濟家タルウボーバンノ論者(同氏ノ著述セルプロセ
 ードシノムロアセールト題セル書ニ詳カナリ)ハ全ク諸税ヲシ
 テ悉皆歳入税ニ帰セシメントスルニアリト予輩ハ認了セリ
 其他尚ホ往古和蘭獨逸聯邦澳地利(千八百十二年ニ於テ)バヒエ
 ール(千八百十五年ニ於テ)普魯士等ニ於テモ皆此歳入税ヲ施行
 シタリ然レモ近時盛大ニ之ヲ施行セシハ英國ニシテ即チ千七
 百九十八年ヨリ千八百十六年ニ至ル間之レヲ盛行シ又其後千
 八百四十二年ヨリ再ヒ之レヲ盛行セリ

經濟上ノ所見ヲ以テ此歳入税ノ性質ヲ推考スレハ則チ諸税ノ内ニテ最モ正當ナルモノト思ハル蓋シ此税ハ納税者ノ真正ノ家産ニ能ク相當スルモノニシテ且之レヲ徵收スルノ費用ハ間税ヨリモ大ニ鮮少ナレハナリ

然リト雖且又此税ヲ賦課スルコトニ就テハ曾テ種々ノ弊害カ現出シタリ請フ試ニ之ヲ陳セシ凡ソ各人ノ歳入額ヲ定ムルニハ其人ノ報告ニ據ルカ或ハ政府ノ調査ヲ以テスルニ非サレハ能ハサルモノナリ其人ノ報告ニ據ルキハ之レニ詐偽アルノ恐れアリ又政府ノ調査ヲ以テスルキハ嚴酷ニ過キ且納税者ノ為メニ大ニ損失ヲ來タスノ患ヒアリ殊ニ製造者及ヒ商人ニ就テハ其害最モ著シキモノナリ何トナレハ彼等ニ對スル世人ノ信憑ハ甚ク失セ易キモノナルカ故ニ若シ検査官ノ彼等ノ歳入額ヲ調査シテ以テ其歳入額ハ僅カニ如是ナリト確定スルキハ世人

カ其業ノ内実衰微シタルヲ了知シテ其商品ヲ購求セサルニ至ルモノナレハナリ

其他又歳入額ハ確乎不変ノモノニアラスシテ時ニ増減アルモノナレハ之ヲ確定スル最モ難キモノナリ

歳入税ニ於テモ亦タ斯ノ如ク其種々ノ弊害アルヲ以テ未タ此税ノ成立セサル國ニ於テハ容易ニ之レヲ執行スルヲ得ヌ又既ニ成立セル國ニ於テモ之レヲ施行スルニハ大ヒニ思慮ヲ加ヘサルヘカラス然リト雖且巴シ氏ノ此税ノ事ニ就キ言ヘルコトアリ曰ク店錢ノ價格ヲ以テ歳入額ノ標準ト為スノ原法ヲ設ケ且真ノ歳入額ノ比例ヨリモ多量ノ税ヲ課セラレタル者ハ親ラ之レヲ証明スルキハ其減税ノ許可ヲ得ヘレト為セハ其弊害ヲ去ルコト容易ナルヘシト

上ニ論セシカ如ク此税ハ各人ノ家産ヲ調査スルコトニ就キ生マ

ル所弊害(此弊害ハ納税者ノ忌憚スヘキ検査ニ因ツテ以テ徵收
スル其他ノ諸税ニモ一般ニ存スルモノナリ)ハ納税者及ヒ官吏
ノ風俗ノ改良スルニ從ヒ且政府カ税額ヲ減少シ而シテ之レヲ
人民保護ノ為メノニニ使用スルニ至レハ漸ク煙滅スルモノナ
リ
試ニ今之ヲ英國ニ徵スルニ收税官及ヒ納税者ノ風俗ノ改良納
税者ノ感動シ易キヲ及ヒ其獨立不羈ナルヲハ他諸國ヨリモ大
ニ著シキカ為メニ其收税法ハ年々ニ改良シタリ
歳入税ノ賦課法ヲシテ容易ナラシムルニハ諸般ノ歳入ヲ永續
歳入終生歳入臨時歳入ニ區分スルニアリ
夫レ歳入ニ賦課スルノ税法ヲ以テスルキハ納税者及ヒ立法者
ヲシテ租税ノ実額ヲ知ラシムルノ便アリ又自ラ租税ヲ減少シ
其用法ヲ善クシ之レヲ簡約ニスルニ至ルノ益アリ

ノ十八

是ニ由テ之ヲ觀レハ歳入税ニ於テハ種々ノ弊害アリト雖モ又
之レカ贖ヒトナルニキ種々ノ功能アルヲ以テ自ラ人皆此税法
ノ蔓延スルヲ希望スルニ至レリ又此税法ハ開明ニシテ且庸
直ナル國民ニハ大ニ適當スルモノト云フヘシ蓋シ是等ノ人民
社會ニハ其公費過度ナラス且其政府ハ人民ノ富ヲ能ク保護シ
且巧ニ之レヲ増殖スルモノナレハナリ是故ニ人民ノ進歩ス
ルニ隨テ賦税ノ事ニ於テハ正當ナラス且收税ノ事ニ於テハ多
費ヲ要スル種々ノ諸税ヲシテ漸次此歳入税ニ換ヘシムルニ至
ルヘシ
予輩カ論旨ハ一ニ此税ノ事ノニニアラサレハ尚ホ此事ヲ就キ
長ク論スルヲ得ス然レモ此税ニ係ル種々ノ取議アルヲ以テ今此
ニハ唯之レヲ辨明スル為メノニニ少シク開陳セントス乃チ或
ル論者ハ此税ハ直税タルノ故ヲ以テ之ヲ駁撃シ又オフセシ民

ハ此税ハ畢竟單一税ニ趣クモノトシテ之レヲ拒絶シタリ然リ
ト雖モ予輩ヲ以テ之レヲ見ル所ハ此駁議ハ却テ此税ヲ保庇ス
ルモノ、如シ(此直税先ニ單一税ハ其他ノ諸税ニ勝ルヲハ當ニ
論究セシカ如クナレハナリ)又(ビューノード氏カ此税ハ人ノ勤勞
ヲ妨害スルモノトシテ之レヲ忌惡シタリ然レモ又何シノ租税
ナリト雖モ直接ニ或ハ間接ニ其勤勞ヲ妨害スルノ弊ナキモノ
アルヤ決シテ弊ノナキモノ有ナルナリ又近時甲ノ論者ハ此税
ヲ稱讚シ又乙ノ論者ハ此税ヲシテ改進税即チ貧者ノ希望シ富
者ノ厭忌スル税トシテ又レヲ忌ミ且恐レタリ實ニ此歳入税ハ
此論者ノ言ノ如ク改進税ナリ蓋シ此税ハ第一ハ人民一般ニ之
ヲ賦課スルヲ得ヘク第二ハ其他ノ諸税ヨリモ最モ正當ニ之ヲ
賦課スルヲ得ヘケルハナリ

近世英國ニ於テハ「ロバールパトル」氏ノ舉行セシ改革ニ因テ此歳

イナレ

入税ヲ設立シタリ然レモ之レヲ設立スルニハ注意セサルヘカ
ラサルヲアリ即チ他ノ諸税ノ傍ラニ復タ此歳入税ヲ設立セン
トスル所ハ其レニ應シテ此税額ヲ減セサルハ曾テ「ウホーバン」
氏ノ言ハル如ク一箇ノ囊中ヨリ數種ノ麵粉ヲ取り去ルノ恐レ
アリト云フヲ是レナリ

右ニ論スルカ如ク英國ニ於テ理財上及ヒ商業上ノ改革ニ因ツ
テ租税ヲ減少シ或ハ之レヲ廢止シタルヨリ生スル一時ノ不足
ヲ補足スルカ爲メニ千八百四十二年歳入税ヲ設立セシニ税額
ノ輕少收税ノ事ニ於テ煩雜ナラサルヲ各人ノ家産ニ應シテ租
税ヲ賦課スルヲ等ヲ希望スル論者ハ大ニ之レヲ稱讚シタリ又
此税ハ商業上ノ改良ヲ大ニ助成シ加フルニ曾テ英國ニ於テハ
他國ニ比較スレハ直税ハ甚タ稀ニシテ多クハ間税ナルヲ以
テ大ナル歳入ヲ有スル者ト雖モ些少ノ税ヲ納メ来タリシモ今

ヤ此税ノ設立セシニ因リ此獎ヲキテ以テ納税者モ亦大ニ之
レヲ嘉納シタリキ

英國ニ於テ方今歳入税ヲ分ツテ五種ト為セリ即チ第一不動産
ヨリ徴收スヘキモノ第二不動産ノ借受人ノ利分ヨリ徴收スヘ
キモノ第三養老銀其他政府ヨリ毎歳收入スルモノ(例ヘハ公債
ノ利息ノ如キモノ)ヨリ徴收スヘキモノ第四工業及ヒ商業等ノ
利益又ハ貸銀ヨリ徴收スヘキモノ第五官吏ノ俸給(但百五十磅
即チ三千八百フラン)以上ノモノ(キ限ル)ヨリ徴收スヘキモノ
是レナリ而シテ各納税者ノ納ムヘキ税額ハ當人ノ報告(其歳入
額)ニ因テ以テ之レヲ定ムルモノトナス但シ其報告中ニ詐偽
遺漏等ナカラシムル為メニ時々直接又ハ間接ノ検査ヲ行ヒ又
各納税者ヲシテ其報告中ニ詐偽遺漏等ノ事ナキヲ誓約セシメ
又若シ詐偽等ノ事アレハ其税額三倍ノ罰金ヲ徴收スルノ法ヲ

設ケテ以テ之レヲ確實ナラシム

第九章

所得税及ヒ貸銀税

所得税ハ復タ不動産或ハ動産ヲ有スル者ノ歳入ノ税トモ云フ
トヲ得ヘキモノナリ乃チ此税ヲシテ不動産ノ歳入税トスレハ
則チ地稅ト混淆シ又動産ノ歳入税トスレハ則チ動産及ヒ工業
商業智術上ノ利益ヨリ生スル歳入ノ税ト等シキモノナリ
凡ソ所得ハ直接ニ賦税スルコト最モ難キ歳入ノ一種ナリ何トナ
レハ總テ所得ハ其額ヲ包匿スルコト極メテ易キモノナレハナリ
今ヨリ二十年前「シ」氏ノ此所得税ノ事ニ就テ言ヘルコアリ
曰ノ諸般ノ所得ニ等シク一般ニ賦税スルコトハ唯想像上ノコト
ニシテ實際之レヲ施行スルノ方法ハ世人ノ未タ曾テ之レヲ
發見セサルモノナリ又將來ニ於テモ奈行セサルヘシト予ハ信

シテ疑ハサル所ナリ蓋シ是レ全ク物ノ真理ニ及シタモノナ
レハナリト然リト雖氏力新ノ如ク開陳セシハ近時此所得税
ノ事ニ就キ發生シタル議論ノ前キニ係リ又英國ノ經驗ニ因リ
テ之レヲ実行スルヲ得ルニ至リタル前ニ係ルモノナリ故ニ氏
ハ此事ニ就テハ充分ニ熟考セサリシト予輩ハ信認シタリ
公債ノ利息税ハ即チ所得税ノ一種タリ但シ此利息税ハ政府ノ
後來復タ新タニ公債ヲ募ルコトヲ自ラ禁スルノ際ニ非サレハ其
効ナカルヘシ何トナレハ政府ノ復タ新タニ之レヲ募ルキハ必
ズ財主ハ他日又利息税ヲ課セラルヘシト想像シ豫メ此税ヲ其
利息中ニ算入スルヲ以テ政府ハ前キニ募リタル片ヨリモ高利
ヲ支給スルノ約束ヲ以テスルニ非サレハ之レヲ募ルコト能ハサ
ルモノナレハナリ抑ク正理ノミニ着目スル片ハ斯ノ如キ租税
ヲ設立スルハ即チ政府ハ其債主ヲ欺クモノト云フヘシ何トナ

イニテ

レハ政府ノ初メニ此債主ヨリ借ル片ニハ以後利息額ヲ減少ス
ルコトナク正シク定期ニ之レヲ支給スヘキ約定ヲ以テセシモノ
ナレハナリ然リト雖氏此債主ハ又自己ノ歳入額ニ應レテ國費
ヲ補助スヘキモノナリト云フコトニ着目スレハ則チ敢テ此税ヲ
シテ不正ノモノトモ看做スコト能ハサルヘシ
總テ債銀ハ予輩ノ如ク各歳入ニハ悉ク賦税スヘキモノナリト
信スル論者ノ説ニ據レハ必ス賦税スヘキモノナリ然レ氏若シ
此債銀税重キ時ハ忽チ種々ノ弊害ヲ生スヘキモノナルカ故ニ
都テ債銀ハ賦税スヘキモノノ内ニテ最モ不便ナルモノ、一ナ
リト云ハサルヘカラス實ニ債銀税ハ諸歳入税ニ存スル種々ノ
弊害ヲ最モ著シク現出セシムルモノニシテ乃チ英國ニ於テハ
此税ヲ名ケテ擾亂税(擾亂ヲ醸成スル)税ト云フ義ト為シタリ
古今ノ分頭税ハ即チ皆債銀税ナリ又時宜ニヨリテハ微々タル

營業者ヨリ徴收スル所ノ營業税及ヒ人生必須ノ產物(包麩、鹽、肉、飲料等)ノ如キヲ云フヨリ徴收スル所ノ間税モ亦タ此債銀税ニ等シキモノニシテ人民ノ擾乱ヲ醸成シ易キモノナリ又封建時代ノ課役及ヒ方令ノ課役ハ時宜ニヨリテハ亦タ此擾乱税ノ部類ニ入ルヘキモノナリ

智術ヲ以テスル業ヲ營ム者(例ハハ代言者、醫師、機械師、教師等)ノ如シモ亦タ皆債銀ヲ受クルモノナレハ亦タ等シク債銀税ヲ賦課スヘキナリ然レ其或ル者ハ全ク職人ト同一ニシテ已レカ能力ノ債銀(多クハ甚ク僅少ノモノナリ)ノミヲ以テ生活シ又他ノ者ハ多少起業者ニシテ亦タ多少營業税ヲ納ムル者ノ部類ニ入ルヘキモノナリ又政府ノ官吏モ亦等シク債銀ヲ受クルモノナリ然レ其彼等ニ賦税スル國ハ蓋シ多カラサルヘシ何トナレハ彼等ニ此税ヲ徴收スルハ即チ右手ヲ以テ得ル所ノモノヲ左

ノイニシニ

手ヲ以テ與フルノ道理ナレハナリ然リト雖モ又斯ノ如ク右手ヲ以テ得ル所ノモノヲ左手ヲ以テ與フヘカラサルモノト為スモ其本ヲ推セハ是レ唯計算上ノ想像論ニシテ取テ之ヲ以テ確論ト看做スヘカラサルモノ、如レト雖モマタ一理ナキニアラズ故ニ寧ロ官吏ノ俸給ニ賦税スルヨリモ其俸給過量ナリト思想スルキハ宜レク之ヲ減少スルニ若クハナカルヘシ然レモ又政府ニ對シテハ如何ナル者ニモセヨ皆同一一般ナリト云フ原理ニ着目シ以テ夫ノ官吏ヲシテ政府ノ債主ト等シク亦タ國費ヲ補助セシムル事モアルヘシ

凡ソ債銀税ハ概テ全ク傭夫ヨリ出タヌモノニシテ此傭夫力後タ其傭主ヨリ之ヲ徴收スルヲ能ハサルモノナリ何トナレハ債銀ノ價格ハ傭夫ノ必要ナル費用額ニ因ツテ定ムルヨリモ寧ロ職業ノ供給ト需用トノ權衡ニ因テ定ムルモノナレハナリ此

論ハ即チ「エシヤン」^三「ブル」^一ノ「ド」^三ノ首唱スル所ナ
リ然レモ「ミツ」^リ「カル」^ドノ二氏ノ論ハ大イニ之レト背馳シテ
以テ債銀税ハ常ニ債銀ヲ騰貴セシムルモノナルカ故ニ此税ハ
必ス傭主ヨリ到底支給スヘキモノトナセリ蓋シニ氏ノ此論ノ
謬誤タルヲ發セシテ明瞭タルヘシ且此論ノ結果タル貧人ニ
係ル租税ヲシテ幾許重クスルモ決シテ弊害ナキモノナリト云
フニ至ルヘシ
上ニ論スル所ヲ以テ考フルキハ貧者ノ歳入ニ賦課スル租税ハ
極メテ輕少ニセサルヘカラス又政府ノ真正ノ費用ノ為メニ要
スルモノニ非サレハ之レヲ至當ノモノト做スベカラサルナリ
然リト雖モ貧者ヲシテ全ク租税ヲ免カレシムルハ是レ又不正
ト云フヘシ蓋シ彼等ハ必ス社會ノ利益ヲ幾分力受クルヲ以テ
此利益ヲ興起スル為メニ要スル費用ヲ補助セサルヘカラサル

イ三十三

カ故ナリ殊ニ人民一般ニ政權ヲ附與セル共和政治ノ國ニ於テ
ハ如此ナラサルヘカラス
總テ直税ハ租税ノ用法ヲ討論シ且之レヲ検査スルヲ得ヘキ權
利ヲ有スル人民ノ為メニハ大ニ便益ヲ與フルモノト云フヘシ
直税ノ收入額ハ甚タ明瞭タルモノナルカ故ナリ又直税ハ下民
ヲシテ政府ノ賑恤政府ノ諸事ニテ預スルヲ政府ニ幫助金ヲ請
求スルヲ政府ノ猥リニ他國ノ事ニ干渉スルヲ等ハ大ニ國害ヲ
醸スモノナリト云フ「」ヲ了解セシムヘキ性質ヲ有スルモノナ
リ
實ニ間税ヲ以テスルキハ下民ハ不相當ニ公費ヲ補助スルニ至
ルヘキモノナリ故ニ國ノ文明ヲ進ムルニハ下民ヲシテ租税ヲ
免カレシムルニアラスシテ明瞭ナル直税ヲ許諾セシムルニマ
リ

イ三也

第十編

証書税 簿記税 及 ヒ 印税

証書税ハ総テ所有物ノ贈付其貸與不動産ヲ動産ト為スル民間
及ヒ商業上ノ諸約定ニ就テ徴收スルモノナリ此税ハ第一政府
ノ簿帳ニ其諸約定ヲ記入スルノ法式ニ因ツテ以テ之レヲ收入
ス但是レオ為メニ別ニ一官署アリテ此簿記ノ事ヲ擔任ス又該
署ハ其税ヲ收入シ且諸約定書ノ日月及ヒ其事ノ確定ナルヲ公
証スル為メノ公務ヲ掌ル第二諸約定ヲ書スヘキ政府ノ押印ア
ル用紙ニ因ツテ以テ之レヲ收入ス

第一章

相續及ヒ贈與税即チ報酬ヲ與ヘスレテ得ル所ノ

物ニ賦課スル租税

夫レ政府ノ相續及ヒ贈與ノ税ヲ設立スルハ即チ政府ハ相續

及ヒ贈與ノ時ニ於テ其一部分ヲ分テ受クル者ノ如クニシテ之
レニ干預スルモノト云フヘシ実ニ此稅ハ相續人ノ今相續スヘ
キモノヲシテ此稅額ニ從テ減少セシムルモノナリ
抑ク此稅ハ諸稅ノ内ニテ殊ニ納稅者ニ直接ニ係ルノ便アリ又
最モ單純ナルノ益アルモノナリ然レモ此稅ノ為メニ財產ノ所
有者ヲシテ節儉ヲ怠タルヲナカラシムルカ為メニ又其相續人
ヲシテ此稅ヲ納ムルカ為メニ損失ヲ為シテ以テ今授受セシ所
ノ財產ヲ賣却スルヲナカラシムルカ為メニハ此稅ヲシテ輕少
ナラシムルヲ要ス

此稅ヲ賦課スル事ニ就キ一難事タルモノハ即チ遺物ノ價值ヲ
定ムルトニアリ佛國ニ於テハ其遺物ニ負債ノ附屬スルト否ト
ヲ問ハス總テ其賣却ノ價值ニ從テ其稅ヲ徵收セリ然リト雖モ
バレトモ此ノ言ヘル如ク此方法ハ正當タルトノ原理ニ適ハサル

イニキ

モノナリ故ニ此稅ヲ賦課スルノ真正ナル基本トスヘキモノハ
白耳義、普魯士、英吉利ニ於ケルカ如ク其負債等ヲ除キ眞ニ相續
人ノ手ニ落ツル所ノモノニアリ又同氏ノ説ニ從ヘハ相續人カ
負債ヲ約束シ或ハ損失ヲ以テ其相續セル物品ヲ賣却スルトナ
ク而シテ此相續物品ヨリ生スル所ノ歲入ヲ以テ之レニ屬スル
負債ヲ償却スルニ至ラシムルニハ此稅ヲ徵收スルニ十分ニ猶
豫ヲ與ヘサルヘカラサルモノナリ
又此稅ヲ徵收スルニハ相續スヘキ遺物ノ多寡ト親族ノ等級ニ
應シテ前進ノ比例ヲ以テスルヲ得ヘキモノナリト思考スル者
アリ
各人ノ所有タルトテ廢シテ總テ國民共有ノモノト為サントス
ル論者ハ此稅ヲシテ諸般ノ遺物ヲ政府ヘ没入スルノ一方畧ト
為シタリ蓋シ此論者ノ所見ハ素ヨリ予輩ノ所見トハ全ノ距離

スルモノナリ

第二章

賣買及ヒ譲与税即チ報酬ヲ與ヘテ以テ得ル所ノ物ニ賦課スル租税

此税ハ上ノ相續税ノ如ク動産或ハ不動産ヲ賣買スル等ノ時ニ於テ其價格ニ應シテ徵收スルモノナリ
パレシ氏ハ總テ買主ハ其價ノ内ニ此税額ヲ算入シテ賣主ニ支給スヘキ價ヲ此税額ニ從テ減少スルモノナルカ故ニ此税ハ常ニ賣主ヨリ支給スヘキモノトナセリ然リト雖氏予輩カ見ル所ヲ以テスレハ真ニ之レヲ出タス者ハ賣主買主ノ内ニテ他ノ者ヨリモ一層多ク要求スル所ノ者ニアリト思ハル又多クハ双方ヨリ其一部分ヲ出タスモノナルヘシ
凡ソ所有物ノ讓与ハ當テ之ヲ所有スルヨリ一層多クノ利益ヲ

生セシムル人ニ之レヲ移サシムルモノナリ故ニ其税ヲ輕少ニシテ此讓与ヲ容易ナラシムレハ即チ社會ノ裨益タリ其他又其税ヲ輕少ナラシメハ竊カニ之レヲ賣買シ或ハ其價ヲ隱蔽スル等ヲ減滅スルハ論ヲ突クサル所ナリ

第三章

印税

印税(其起源ハ近時ニアリ)ハ法律ノ保証スル諸証書及ヒ諸契約書ニ就テ徵收スルモノナリ乃チ公証人代理人使吏ヨリ出ス所ノ諸書或ハ是等ノ周旋人ナクシテ各人ノ間ニ直チニ交換セル諸証書商業上ノ証券諸願書等ハ皆印税ヲ課セラル、モノナリ
政府ハ各人ヲシテ諸証書ヲ筆スルニハ其料紙ニ必ス政府ノ証印アテシム故ニ各人ハ其諸証書ニ政府ノ証印ヲ受クル為メニハ既ニ政府ノ押印アル料紙ヲ購求スルカ然ラサレハ其官署ニ

往キテ証印ヲ受ケサルヘカラス
佛國ニ於テ此稅ハ政府ノ証印アル料紙ノ大小ト此レニ記載ス
ル金額トニ應レテ課セラルハモノトセリ此稅ハ斯ノ如ク金額
等ニ應レテ之レヲ賦課スルモノニシテ且其稅額程度ナルハ
他ノ諸稅ヨリモ害ノ少キモノナリ
此稅ヲシテ新聞紙、印刷品、廣告書、張票、等ニ賦課スルノ國尠シト
セス然レモ斯ノ如クナルハ此印稅ハ出板ノ自由及ヒ人ノ新
發明ヲ世ニ通知セシムルヲ妨害スルノミナラス尚印刷ニ屬
スル諸業及ヒ新聞紙等ニ據ラサレハ世ニ公行スル丁能ハサル
諸業ヲモ妨害スルモノト云ハサルヘカラス斯ノ如キ印稅ハ予
輩ハ保庇スルヲ得ヘカラス租稅ノ一ナリ

第十一編

通常專ヲ用ル所ノ種々ノ間稅即チ支消稅、政府ノ
專賣法ヲ以テスル租稅、關稅、入府稅ノ性質、其結果及
ヒ其遷轉

第一章

間稅ノ總論

間稅内ニハ農業或ハ工業上ノ物產ニ賦課スルモノ夥多ナリ但
シ其物產ニ賦課スルニハ物產製所ニ於テ或ハ其流通ノ間ニ於
テ或ハ高賣ノ店頭ニテ之レヲ販賣スル時ニ於テ或ハ市街ニ輸
入スル時ニ於テ或ハ國境ヲ出入スル時ニ於テス
予輩ハ間稅ヲ分ツテ四類トナス即チ左ノ如シ
國產ニ賦課スル間稅即チ其支消稅(英國ノ國產稅ト同シ)
政府ノ專賣法ヲ以テスル間稅

内國ニ輸入スル外國産或ハ外國ニ輸出スル内國産ニ賦課スル関稅

諸府ニ輸入スル物産ニ賦課スル入府稅

政府ニテ此諸稅ヲ徵收スルニハ其物産者及々其商人ヨリス但シ之ヲ徵收スルニハ檢査官及ヒ監察官ヲ置キ以テ脱稅詐偽等ナカラシム然リ而シテ此物産者及ヒ商人ハ其後又之レヲ支消スル人ヨリ此稅ノ全額又ハ其一部分ヲ支給セシムルヲ勉ムルモノナリ故ニ此稅ハ物産ノ費用ニ加ハリ以テ其價格ヲ騰貴セシメ其支消額ヲ減少セシメ又隨テ物産ノ製造額マテモ減少セシムルニ至ルヘキモノナリ

是故ニ時ニ因リ支消者ニ賦課スルノ目的ヲ以テ租稅ヲ設立スルヲアリト雖モ其支消者ト共ニ亦ク物産者及ヒ土地ノ所有者マテモ之レノ影響ヲ被ムルニ至ルヲアリ

此弊害ハ何レノ租稅ニ於テモ皆一般ニアラサルナレ然リト雖モ間稅ニ於テハ最モ甚シキモノナリ何トナレハ政府ハ常ニ此間稅ヲ多クハ人生必須ノ物品ニ課スルヲ以テナリ但シ人生必須ノ物品ハ人民一般ニ悉皆之レヲ支消スルモノナルカ故ニ其稅ノ收入額ハ頗ル多キモノナリ其人生必須ノ物品トハ例シテ云ハ、食物、飲料、鹽(是レモ亦ク食物ノ一ナリ)等ノ如キヲ云フ是ヲ以テ貧者ニ欠クヘカラサル物品ハ其價騰貴シ加フルニ彼等カ間稅ノ過半ヲ負擔スルニ至ルヘキナリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ間稅ハ元来其性質人民ノ家産ト平均ナラサルモノニシテ(縱令其支消額ニ比均レテ之ヲ徵收スルト雖モ)富者ヨリモ貧者ニ多ク課セラル、比例ノモノナリ今之ヲ証明センニ鹽稅ヲ以テスレハ最モ明瞭ナリ即チ人民各々鹽(貧民ハ食物ヲ調味スルニハ太低塩ノニヲ以テス)ヲ費ス、殆、同一

ノ分量ナルヲ以テ政府ニ塩税ヲ納ムルモ亦同一ノ金額ノ以テ
不然レ其家産ヲ視レハ著シキ差等アリ加之又極メテ貧困ニ
シテ且夥多ノ兒童ヲ養フ所ハ者ハ塩ヲ費スヲ最モ多量ナリ此
際ニ於テハ塩税ノ家産ノ倒比例(家産小ナルハ小ナルニ從ツテ
愈々多量ノ税ヲ納ムルヲ云フ)ニシテ納税者ノ貧窮ノ度ニ應ジ
テ増加スルモノナリ又斯ノ如キ税種ノ内ニ麵粉税ヲ編入スル
ヲ得ヘレ益シ麵粉税ハ塩税ノ如ク貧人ノ食物ニ就キ痛歎マ
ヘキ影響ヲ生セシムルモノナレハナリ其他尚ホ葡萄酒税ヲシ
テ亦タ是等ノ税ト同種ノモノト為ヌヲ得ヘレ何トナレハ此税
ハ葡萄酒ノ善悪ヲ問ハス只其分量ノミニ比例スルモノナルカ
故ニ一エクトリトルノ價僅カニ五十フランクノ粗品モ亦タ
其價五百フランク或ハ五千フランク精品モ同一ノ税額ヲ出タ
スモノナレハナリ實ニ貧者ハ間税ノ過半ヲ出タスニ至ルモノ

ナリ既ニ英國ニ於テ間税ヲ調査セシニ其三分ノ二ハ歳入税ヲ
出スホドノ歳入ヲ有セサル者ニ由テ支給セラレシト云フヲ
看出シタリ
或ル論者及ヒリカレドモ亦タ人生必須ノ物品ニ賦課セル租税
ハ多クハ貧人ニ係ルモノト貧人ハ彼タ必ス之ヲ富人ヨリ繳收
スルモノナリトノ説ヲ主唱スルト雖モ決シテ然ラサルモノナ
リ此論者ノ言ノ如クナルニハ總テ職工ハ互ヒニ相競ハサルモ
ノニシテ且物産ノ諸賞ヲ悉皆其買主ヨリ繳收スルニ至ルノ際
ニ非ヤレハ能ハサルヘシ
ハシ「氏言ヘルヲアリ曰ク間税ニ於テハ其稅數ノアルニ隨テ
又異ナリタル比例(家産ト稅額トノ比例)ノ度數アリ而シテ此度
數ハ生活ノ為ノ為ノニ欠クヘカニナル食物カ又營業ノ為メニ
必要ナル物品ト奢侈ノ用ニ供スル物品トノ間ニ其必要ノ多少

ニ因リテ變スルモノナリト此言ヤ實ニ其當ヲ得タルモノト云
フヘシ其人生必須ノ物品ノ部類ニハ麵包、野菜、塩、尋常ノ飲料、
肉、牛酪、牛乳、尋常ノ織物、石鹼、如キヲ算入シ又奢侈ニ属スル物
品ノ部類ニハ絹織物、馬車、煤、燐、大、虚飾物、遊戲物、烟草、鴉片、
如キヲ算入スルヲ得ヘシ

此ニ類ノ中間ニ置クヘキモノハ諸工ニ要スル物品、材木、紙、書籍、
薪、砂糖、茄菲、茶、果物、魚、乾酪等即チ是レナリ然リト雖モ此紙、書籍
ハ又人生必須ノ物品ノ部ニ入ルヘキモノナリ又國ニヨリテハ
薪、茶、砂糖、茶、茄菲、若シ貧者ノ食物中ニ入ルノキハモ亦人生
必須ノ物品ノ部トナス

右ニ論スル如ク間税ニ於テハ比例ニ種々ノ度アリテ公平ナラ
サルノ弊害ノ外ニ尚ホ種々ノ弊害アリ即チ間税ハ詐偽妄行、
賣物品ノ量ヲ濫匿スルヲ等ヲ云フヲ釀成セレメ又收税官吏ト

納税者トノ間ニ常ニ争鬭ヲ察セシムルモノナリ是レ其一ナリ
又詐偽妄行ヲ妨止センニハ多ク官吏ヲ要ス蓋シ此官吏ハ物
産ノ製造、其流通、其販賣ヲ監察スルカ為メノ一軍隊ノ如シ而シ
テ其俸給ハマタ物産者又ハ其支消者一般ノ頭上ニ係リ且此官
吏ノ監督及ヒ其收税ノ方法ハ大ニ人民ヲ困却セシムル
モノナルカ故ニ人民一般ハ自ラ此間税ヲ厭惡スルニ至ル是レ
其二ナリ又間税ハ物産費用ニ加ハリ以テ其價ヒト混淆スルカ
故ニ立法者政府並ニ納税者俱ニ此税ノ輕重ヲ計考シ能ハサラ
シムルニ至ル是レ其三ナリ

然レモ此第三ノ弊害ハ總テ國民ハ其受クル所ノ利益ト其納ム
ル所ノ税額トヲ計考スルヲ得ルハ至善ノ事ナリト思考スル人
ノ所見ニ於テハ實ニ弊害ト看做スト雖モ政府ノ費用ヲ口實ト
ナレ以テ其歳入ヲ増加スルノ方策ニ及々タル會計官ハ彼レニ

及レテ之レヲ認メテ大益ト看做シ是レ則チ間税ノ直税ニ勝ル
所以ナリト想像セリ

實ニ間税ハ物品ノ支消者(即チ其納税者)ヲ眩惑セシムルモノナ
リ何トナレハ彼等ハ之レヲ購求スル毎トニ其税ヲ少クツク知
ラス識ラス納ムルモノナルカ故ニ自ラ其價ヒノ高貴ナルヲ認
了スト雖正直チニ其源因ヲ覚悟スルコトナク又其直價ト過價ト
ヲ分別スルヲ識ラス且ツ之レヲ販賣スル者ハ間接ノ收税官タ
ルヲ知ラサルモノナレハナリ是ヲ以テ唯會計上ノ事ノミニ着
目シ而シテ會計上ノ一大要件タルモノハ納税者ヲレテ知ラス
識ラス納税セシメ以テ租税ノ事ニ就キ苦辛ヲ訴フルコトナカラ
シムルコトニアリ(即チ上ニモ記セシ如ク會計上ノ一大要件ハ人
民ノ苦情ヲ訴フルコト最少ニシテ最大ノ税額ヲ收入スルコトニ
アリ)ト思考スル者ハ納税者ヨリ共歳入ノ多分ヲ吸取シ得ヘキ此

間税ヲレテ最良ノモノト決定スルヲ得ヘシ然リト雖正是レ即
チ奸猾ノ會計官ノ算畧ニシテ決シテ真正ノ政治ニ非サルヘキ
ナリ然リ而シテ其支消者(間税ヲ負擔スル者)カ負擔スル所ノモ
ノハ適ニ此間税ノミナラサレハ各ク已ムコトヲ得ス其支消額ヲ
省減セサルヘカラス然ラハ則チ間税ニ関セサル物産者ニ至ル
マテ間接ニ之レカ影響ヲ被ムルニ至ルヘシ是ニ於テカ一般ノ
艱難ヲ發生シ而シテ衆人カ此間税ハ無論諸般ノ租税ヲ忌惡シ
加フルニ裁カ立法者政府社會マテモ怨謗スルニ至ルヘシ
予輩ハ今茲ニ間税ノ事ニ就キ唯人ノ記憶ノ為ノニ開陳スヘキ
コトアリ間税ニ於テハ收税法ノ煩雜ナルコト納税者ノ困却スルコ
ト時時ヲ徒費スルコト等ノ弊害アルモノナリト云フコト即チ是レナ
リ(第八篇第六章ヲ見合スヘシ)

間税ハ到底各支消者ヲレテ其支消額ヲ減少セシメ加之尙支消

者ノ員數ヲモ減少セシムルモノナ
按スルニ間税ヲ以テスルハ納税者ノ人ノ想像スルカ如クニ
之レカ影響ヲ被ムルモノニアラス亦夕人ノ想像スルカ如クニ
之レカ影響ヲ被ムラサルモノニモアラサルナリ又此税ハ屢ク
往古ノ分頭税ノ如キ惡ムヘキ性質ノモノト成リ以テ人民ノ擾
乱ノ原因トナリレド甚シトセス又此税ニ就キ物産者及ヒ商人
ノ情形ヲ觀察セサルヘカラス彼等ハ時ニヨリ欠クヘカラサル
資金ヲ其金庫ヨリ出シテ以テ此税ノ前納ヲ為シ置クモ速カニ
之ヲ支消者ヨリ繳收スルコト能ハサルモノナリ(彼等カ初ニ出シ
置タタル税ヲ繳收スルコトヲ得ヘキモノト假想ス)且彼等ハ大藏
官吏ノ調査ヲ受ケテ示レテ此調査ヨリ生スル所ノ不快時間ノ
徒費ニ堪ヘサルヘカラサルモノナリ
凡ソ租税ニ於テハ直税ナリ間税ナリ皆弊害アラサルハナシ然

レ氏正理上ヨリ見ルハ直税ハ其害少ナキモノナルカ故ニ之
レヲ採用スヘキハ必然ナリ然リト雖モ又會計上ノ事ノ三ニ着
目スレハ間税ハ採用スヘキモノ、如シ
然レ氏直税ハ政治上ヨリ見ルモ尚ホ採用スヘキモノナリ何ト
ナレハ直税ヲ以テスルハ人民ハ會計ノ事ヲ能ク了解スルヲ
得レバナリ又收税ノ點ヨリ見ルモ尚且極メテ採用スヘキモノ
ナリ蓋シ直税ノ收税費ハ間税ニ於ケル如キ著シキモノニ非カ
ルヲ以テナリ今佛國ヲ以テ之レヲ徴スルニ間税ニ於テハ其收
税費ハ税額ノ一割乃至二割ニ及ヒ又其種類ニヨリテハ三割乃
至四割ニ至ルコトアルモ直税ニ於テハ其收税費ハ僅カニ八分ノ
比ナリ
到底ビイノド氏ノ言ノ如ク論定セリルヘカラス氏ノ言ニ曰
ク間税ヲ要用トスルコトハ國費増カスルニ從テ益ク已ムヲ得

ナルニ至ルヘシ然レ此間税正理上ヨリ見尚ホ經濟上ヨリ
見ルモ是レヲ正當ノモノトナス可能サルモノナリト
又間税事ニ就キ風習上ヨリ見ルキハ更ニ議論ノ生スルアリ
既ニミール氏ノ言ヘルコトアリ曰ク英國ノ人民ハ往古ヨリ直税
ヲ忌惡シテ間税ヲ愛慕スルノ意思アリ然リト雖此意思ハ此
ニ種ノ税ヲ彼是相比較シテ以テ其功能ノアル所ニ基ツキシモ
ノニ非ラスシテ唯小兒ノ言ノ如キ事ニ基ヒスルモノナリ蓋シ
英人ハ税ヲ納ムルコトハ忌ム所ニ非サレモ收税官ノ面目ヲ見ル
ヲ好マス又其嚴酷ナル要求ヲ受クルヲ欲セサルヲ以テナリ故
ニ曾ツテ英人ノ出タス所ノ税ハ大抵物品ヲ購求スル時ニ其代
價中ニ滯匿セル税(即チ間税)ノミニシテ是レニ久シク慣レタル
モノナリト然レモ英國人ノ衆説ハ理財上ノ改革ニ方リ歲入税
ヲ徵收スル事ニ就キ發ヤシ議論ヨリ大ニ變化シ而レテ現今ニ

三十三

至リテハ間税ヲ以テスルキハ貧人ハ富人ヨリモ多分ニ税ヲ納
ムルノ比例ニ至ルベキヲ一般ニ了解シタリ
近代政府ノ某代辦者ハ衆議院ニ於テ凡ソ間税ヲ以テスルキハ
納税者ハ人ヲ厭苦シテ憤氣ヲ生セシムル大藏官吏ト相接セザ
ルノ便益アリトノ言ヲ以テ間税ノ直税ニ勝ルコトヲ主張セリ然
リト雖モ又間税ニ於テモ國境及ヒ府境ノ税官等許多アリ而シ
テ此税官ハ所謂收税官(直税)ヨリモ一層納税者ヲレテ厭苦ス
ルニアラスマ

第二章

第一類(前章ニ於テ間税ヲ分ツテ四類トナス事ヲ
開陳シタリ是レ則チ其第一類ナリ)即チ間税(附性
昔佛國ニ成立セシ合集税英國ノ國產税
間税ノ事ニ就キ既ニ論述セシ右ノモノハ皆第一類(國產税)ニ適

スルヲ以テ今復タ之レヲ論スルヲ要セサルオ故ニ此ニハ只緊要ナルニ件ノ考説ヲ附加センノミ
凡ツ立法者ハ營業者ヲシテ可及的の自由ヲシムル為メニ稅吏ノ監察及ヒ其他ノ所為ヲシテ極メテ簡約ノモノト為サハルヘカラサルモノナリ
但令ハ今麥酒釀造所ニ要スル物品ニ賦稅スルルルハ其調査ハ此製造ニ就キ悉ク干預セサルヲ得サルカ如シ然レモ之レヲ簡約ニシテ英國ノ如ク其麥芽ノミニ賦稅スルモノトスレハ右ノ釀造所ハ一度ヒ此稅ヲ納ムレハ其製造ニ悉ク自由ニシテ稅吏ノ調査等ニ因ツテ妨礙セラル、
ナカルヘシ又立法者ハ諸物産ニ賦稅スルニハ可及的其根本ニ於テセサルヘカラス然ラハ則チ此物産ハ其後稅吏ノ調査ヲ要スル、
ナク貿易上ノ需用ニ應シテ自由ニ流通シ以テ上ノ如ク此調査ノ為メニ妨礙セラル、
ナカルヘシ

三十日

斯ノ如ク為スルハ密賣稅吏ニ對シテ人民ノ不滿及ヒ收稅費ハ自ラ減少スルヲ以テ是レ則チ間稅ノ弊害ヲ可及的消失セシムルノ良策ナリ

第三章

第二類即チ政府ノ專賣等ノ方法ヲ以テ徵收スル支消稅

政府ハ時宜ニヨリ某物ノ專賣ヲ行ヒ而シテ其支消者ヲシテ政府ノ欲スル所ノ價ヒニ之レヲ購ハシメ以テ其製造費用ヲ徵收スルノミナラス尚ホ若シキ利潤ヲ得ル、
ナリ但シ此利潤ハ租稅ノ名義ニテ其金庫ニ收入セラル、
モノナリ
佛蘭西、英吉利、澳地利、西班牙、サレデノギ、羅馬ニ於テハ皆其政府ニテ煙草ノ專賣ヲ舉行セリ
乃チ佛國ニ於テハ一般ニ其培植ヲ禁制シ唯兩三カ所ノミ之レヲ特許シテ其收稅(煙草)ヲ買收シ之レ

ラ精製レ而シテ其事務局ニ因之ニ敗賣セシム此事務局ハ
又特リ外國ノ煙草ヲ輸入スルヲ得ヘイモノトセリ英國ニ於テ
其方法少シク異ナル所アリ即チ内國ニ於テハ煙草ノ培植ハ
悉ク禁止レ而シテ外國ヨリ其輸入スル時ニハ是レニ重税ノ課
收ス又葡萄酒「ボロギョト」スカリーヌニ於ケル如ク此專賣ヲ其人民
へ貸貸スル所アリ又魯西亜「ゾウベレン」ニ於ケル如ク煙草ノ培
植及ヒ其賣買ヲ自由ナラシメ而シテ其代リニハ之レヲ培植ス
ル土地ニ陪税ヲ課シ或ハ又煙草製造人ニ特別ノ營業稅ヲ賦ス
ル所アリ

其他ノ物産ニ於テモ亦夕政府ノ專賣ニ係ルモノアリ即チ佛國
ニ於テハ火藥、遊戲、紙牌、雷管是レナリ又塩稅、砂糖稅等モ專賣
ノ方法ヲ以テ收入スルヲ待ヘキモノナリ又會計上ノ意見ヨ
リシテ保險、鐵道、銀行ノ事業ヲ政府ニ於テ專ラ奉行センヲ希

イ
三十五

望ヒル論者アリ然レモ斯ノ如キ大業ヲシテ政府ノ一手ニ歸セ
シハルニ於テハ著レキ弊害ヲ醸成スルニ至ルヘシ
右ニ論セシ如ク政府ノ專賣ヲ設立スルニ種々ノ方法アリト雖
凡予輩ハ今此ニハ彼是ノ是非得失ヲ論究スルヲナシ只煙草稅
其收稅ノ方法ニ於テハ姑ラク措イテ論セスハ至當ノ租稅ノ一
ナリト言ハンノニ蓋シ租稅ハ食物ノ如キ生活ノ為メニハ必要
ナル物品及ヒ營業ノ本源トナルヘキ物品ニハ之レヲ課スベカ
ラサルモノニシテ一般ニ必要ナラサル支消物ニシテ且之レヲ
過度ニ用ユル片ハ智力ヲ害スルカ如キモノナレハナリ
凡ソ政府ハ諸信者ノ遞送ニ就テハ獨リ之レヲ擔負スルナルカ
故ニ若シ其郵便稅ノ其遞送費用ヨリ多クハ即チ亦夕此專賣
ノ方法ヲ以テ收入スル租稅ノ一トナルヘシ
英佛米ノ三國ニ於テ郵便稅計ヲ大ニ減
年セシ以來此三國ノ

郵便ハ尚ホ政府ノ專業タルモハ蔵
セサルモノトナリタリ然レ此改革ニ因ツテ信書ノ流通ヲ容
易ナラシメタルヲ以テ諸民ノ營業ハ自ラ繁盛シ隨テ政府ノ歳
入ハ他ノ部(郵便税ノ部ニ對シテ云フ)ニ於テ大ニ増加セリ(是レ
則チ郵便ノ大蔵ノ為メニハ間接ニ利益ヲ生スル所ナリ)

第四章

第三類即チ関税

凡ソ関税ヲ設立スルニハ異リタルニ箇ノ旨趣アリ即チ其一ハ
會計上ノ主意ニシテ商品ノ國境ヲ出入スル時ニ其税ヲ徴收シ
テ以テ大蔵ニ若干ノ歳入ヲ得セシムルカ為メナリ又其一ハ物
産ノ繁殖ヲ保護スルノ主意ニシテ外國産ニハ重税ヲ課シテ其
輸入ヲ避ケ以テ其同種ノ内國産ヲシテ内國市場ニ於テ專賣セ
シムル等ノ為メナリ予輩カ今此ニ論スル所ハ只其會計上ノ主

イ
三十一

意ヲ以テ設立スル関税ノ事ノミヲ以テセン何トナレハ物産保
護ニ関セル関税ノ事ハ既ニ他書ニ於テ論究セシヲ以テナリ
都テ関税ハ國境ヲ出入スル物産ヨリ之ヲ徴收スルモノナレハ
自然ニ其價格ヲ騰貴セシムルモノナリ故ニ其支消及ヒ其製造
ヲ著シク妨害スルヲ欲セサルキハ其他ノ租税ニ於ケルカ如ク
其税額ヲシテ輕少ナラシムルヲ要ス其他尚其税額ヲシテ輕少
ナラシムルヲ要スルヲアリ即チ物産ノ密賣ヲ防クカ為メナリ
抑ク密賣ハ概チ重税ヨリ發生スルモノニシテ國境ノ民間ニ種
々ノ惡業ヲ流行セシムルモノナレハ之レヲ未然ニ防止セサル
ヘカラサルモノナリ蓋シ之ヲ豫防スルニハ税額ヲ減少シテ以
テ人民ノ密賣ヲ為スモ其レホドノ利益ナカラシムルノ外良策
ナカルヘシ然リ而シテ斯ノ如ク此税額ヲ減少スルニ於テ大
蔵入ハ却テ増加シ且税吏ノ負及

ルニ至ルヘシ
関税ハ之レヲ課スヘキ物品ノ性質ニ據テ多少人民ノ家産ト相
當シ又其ノ貧富ニ拘ハラス多少一般ニ係ルモノナリ
凡ソ輸出税ハ一般ニ輸入税ヨリモ低下ナルモノナリ然ル所以
ノモノハ第一ニハ内國ノ物産者ヲシテ其物産ノ販賣ヲ容易ナ
ラシメシカ為メナリ第二ニハ輸出ハ内國ニ貨幣ヲ流溢セシム
ルノ結果ヲ生スヘキモノニシテ此貨幣ハ諸般ノ富ノ内ニテ最
上ノモノナリト云フ誤説ニ根據セシテ以テナリ正理上ヨリ見
ルキハ尚會計上ヨリ見ルモ斯ク輸出ノ為メニ格外ヲ為スハ全
ク道理ニ適セサルモノナリ然テ輸出税ハ輸出シタル物産ノ價
ヲ騰貴セシメ以テ内國ニ於テハ其支消額ヲ減少セシムルニ至
ルモノナリ又輸入税モ外國ノ物産者及ヒ内國ノ支消者ノ為メ
ニ是レト等シキ結果ヲ來タサシムルハ必然ナリ加之物産ハ

イ
三十七

幣ニ至ニ交易セラルモノナレハ輸入税ヲ重クシテ物産ノ輸
入ヲ妨害スルキハ即チ其輸出ヲ妨害スルモノト云フヘシ
夫レ関税ハ工商業及ヒ各國彼我ノ親睦上ヨリ見ルキハ著シキ
種々ノ弊害アルモ姑ク之ヲ不問ニ措キ唯會計上ノミヨリ
見ルキハ此税ハ其他ノ間税ニ勝ルモノト云フヘシ蓋シ國境ニ
於テ一度ニ税ヲ納メシ後ハ其物産ハ他ノ間税ニ於テ要スル所
ノ税吏ノ監察及ヒ種々ノ障礙ヲ受クルコトナク自由ニ流通スル
ヲ得レハナリ
輸入品ノ禁ヲ解キ之レニ代ユルニ税ヲ以テシ大蔵ニ僅少ノ入
額ヲ得セシムル物産ニハ其税ヲ免シ諸税ノ額ヲ減少スルニ於
テハ此関税ハ大蔵ノ為メニ著シキ入額ヲ得セシムルニ至ルハ
シ是レ則チ既ニ英國ノ經驗ニ由テ証明スル所ナリ

第五章

後
首

第四類即入府稅

入府稅ハ邑廳ノ費用ノ為メニ支消品ノ諸府ニ輸入スル時ニ徵收スルモノナリ但シ時機ニ因リ其一部分ヲ大政府ノ費用ニ供スルコトアリ

入府稅ハ他ノ間稅ノ如ク其收入額ノ大ヒナラン為メニ大抵人生必須ノ物品及ヒ支消ノ多キ物品ニ課スルモノナルカ故ニ平均ノ原法各人ノ家産ト其納稅額ト平均スルノ法ニ適セス又物價ヲ騰貴セシメ物産ノ支消額ヲ減少セシメ其製造ヲ衰微セシムルモノナリ加之此稅ハ時機ニ因リ諸府ノ諸業ニ就キ保護稅ノ如キ影響ヲ及ホレ且之レヲ徵收スルニハ許多ノ稅吏ヲ要スルモノニシテ復々隨テ多クノ費用ヲ要スルモノナリ
此稅ハ物産ノ支消額ニ應レテ斷然其支消者ニ係ルモノナリ然レニ又物産者及ヒ商人ニモ之レカ影響ヲ及ホスモノナリ何ト

イ三十八

ナハ此稅ノ為メニ物産ノ支消額及ヒ其流通ハ自ラ減少スルモノナレハナリ

入府稅ハ歐羅巴諸國ニ於テ大抵之レヲ施行セリ然レモ英國ニ於テハ曾テ之レヲ設立セザリキ而レテ其邑費ヲ補フニハ別種ノ直稅ヲ以テセリ又白耳義ニ於テハ此稅ハ千八百六十年ノ法令ヲ以テ之ヲ廢棄シ其邑費ヲ補フニハ其他ノ諸稅ノ一部分ヲ以テセリ

入府稅ヲ徵收スルニハ必ス諸府ノ境界ニ関門ノ如キ通行ニ障碍トナルモノヲ設立セサルハカラス又人民ハ府ノ内外ニ於テ物産ノ價ヒヲ比較シテ以テ此稅ノ結果ヲ瞭知スルコトヲ得ルカ故ニ此稅ハ人民ノ最モ忌惡スル所ノモノナリ是ヲ以テ論者ハ大抵之レヲ拒絶スト雖モ府廳ハ此ヨリ重大ノ財本ヲ得ルヲ以テ大ニ之レヲ切望セリ今之レハ其ニ止ムニハ邑費ニ充ツ

ヘキ一種ノ直税ヲ設立セザレバカタク然ラサレハ府廳カ萬事ニ
ニ關涉スルニ由テ生スル所ノ巨費ノ過半ヲ省減セサルハコト
ス

第六章

奢侈品税

凡ソ諸國ノ立法者ハ曾テ概テ經濟上或ハ道德上ノ或ル原理ニ
基キテ奢侈ニ属シ且社會ヲ害スヘキモノト認メタル支消品ニ
税ヲ課レテ以テ之レヲ防止セント欲シタリキ此罰金税(罰金ノ
如キ税ト云フ義)ヲ名ケテ奢侈品税ト為セリ
方今ニ至リテハ此税ハ昔時ノ主意ト異ナルモノト云フヘシ現
今此税ノ主意ハ奢侈ヲ防止セントスルヨリモ寧ロ大蔵ノ歳入
ヲ増加セシメントスルニアレハナリ某ノ論者ハ斯ノ如ク奢侈
品ニ属スル物品ニ課税スレハ則チ人生必須ノ物品ニ課セラル

イ三十九

ハ之即チ特ニ貧賤ノ支消者ニ付ル税ヲレテ輕少ナラシムル
ヲ得ルニ至ルヘシト想像シタリ

右ノ如ク此税ノ旨趣ニ二様アリテ之レヲ以テ奢侈ヲ防止セン
トスルアリ或ハ大蔵ノ歳入ニ増加セントスルアリテ議論ノ二
ニ分離シ大ヒニ紛議ヲ生レタリ然レモ縱令其主意ハ何ノ點ニ
アリト雖モ何物ヲ以テ奢侈品ト為レ或ハ奢侈品ニ非スト為ス
乎之レヲ精細ニ分別スルノ最モ難キモノナリ又及令之レヲ分
別スルヲ得ルニセヨ其奢侈品或ハ奢侈品ニ非サルモ法律ヲ以
テ其支消ヲ妨礙スルハ不條理ナルヘシ何トナレハ此支消ハ所
有ノ權利ヨリ由來スルモノニシテ且法律上ニ於テハ辨明スル
ヲ得サルモ風俗上ニ於テハ辨明スルヲ得ヘキ營業ノ為ニハ其
製造品ノ流出ヲ為サシムルモノナレハナリ
奢侈ニ属スル物品ノミテニ課税スヘキモノト看做スヘカラ

ナルモノナリ又此奢侈品税以テ大蔵ノ歳入ノ強半ヲ收入スルヲ得ヘシト思想スルハ甚クシキ謬誤ト云フヘシ何トナレハ奢侈品為メニ費ス所ノ者ハ無稅者中ニ多數アラサレハナリ然レモ奢侈品ハ本来課稅スヘキモノナリ故ニ方今諸物ノ支消ニ関スル數種ノ租稅中ニ此奢侈品ノ支消稅ヲ挿入セザリシハ過誤ト云フヘキナリ然リト雖モ此奢侈品稅ハ美術畫術彫刻街上ノ物産ヲ妨害スルモノナリト大ニ之ヲ誹議スル論者アリ予輩ハ之レニ答テ曰ハン凡ソ何レノ租稅ニテモ物産ノ一種ヲ妨害セサルモノナレ是レ則チ諸般ノ租稅ヲシテ其額ヲ輕少ナラシムルコトヲ要トスル所以ナリト

然レモ今奢侈品稅ノ部類ニ編入スルヲ得ヘキ諸稅ノ表ヲ製セシムルニ當リ此稅ノ性質ヲ明知スルコト最モ難キコトヲ見出し予輩ハ犬馬僕婢ヲシテ奢侈品ニ属スルモノト為レシメシ然

イロ十

又是等ノ中ニ必要ノ為ニ使用スルモノアリ或ハ又榮耀ノ為ニ使用スルモノアルカ故ニ其必要ト榮耀トノ比例ヲ確定スルコト極ノテ難キモノナリ烟草ニ於テスラ尚且ツ某ノ人為メニハ奢侈品ニシテ又某人ノ為メニハ必要品ナリ(仮令ハ敗血病ヲ豫防スル為メニハ水夫等ニ必要品ナリ又守衛ノ困倦ヲ慰スル為メニハ軍人ニ必要品タルカ如シ)砂糖モ亦タ食物於テ必要ナラサル事ニ之レヲ用ユル人ノ為メニハ奢侈品タルモ之レヲ牛乳又ハ浸劑ニ用ユル婦女子老人又ハ病者ノ為メニハ第一ノ必要品ナリ又某ノ家財ハ某ノ家ニハ奢侈品ナルモ之レヲ營業ノ用具トシテ使用スル家ニハ第一ノ必要品ナリ

錢

一
四
十
院

非

